

研究結果報告書

本研究は、1年間留学プログラムに参加する10人を対象に、渡航前と帰国後の日本語能力と日本イメージを照らし合わせながら、日本語能力、日本イメージと1年間の滞在経験との交差も検討し、日本語能力及びイメージの変化とそれに影響する要因を突き止め、1年間の日本留学生生活が如何に日本語能力と対日観に影響するかを分析しようとするものである。研究手法としては、日本語能力についてはSPOT(Simple Performance-Oriented Test)・絵を描写するタスク(話す能力)と日本語能力検定試験の抜粋テスト、日本イメージは個人別態度構造分析(Personal Attitude Construct、以下はPAC分析)と質問項目は統一して決めているが状況を見ながら順番を変える半構造化面接を利用した。

調査の結果、渡航前と帰国後の日本イメージに多くの変化があることがわかった。共通点は、渡航前10人とも好意的な日本イメージ(日本文化、日本社会、日本人も含む)の所持と、歴史・政治をめぐる認識のずれに対する問題棚上げの態度、留学後でも環境と交通に関する良いイメージに変化が見られない、留学前後での比較で「他律的な日本イメージ」から「自律的な日本イメージ」へ質的な変容が見られた、留学の体験は各人で異なるにもかかわらず、全員の最終的な満足度が高いことである。

相違点としては、日本人に対する評価の変化が挙げられる。留学前の日本人に対する好意的な評価の保持、或いはさらに好意的な評価になった場合もあれば、人格に二面性がある、人付き合いが浅いレベルに留まっている、などのマイナス評価に変わった場合もある。これらの相違が生じたのは留学先の男女比率、留学する前の明確な目標の有無、奨学金受給の有無、日本人との付き合いで齟齬を感じた時の受け止め方、生活上で問題に遭遇した時の対応能力によると推測できる。

言語能力に関しては、日本人の親友の有無を問わず、全員の話す能力は上達しており、特に流暢さが著しく進歩した。一方、文法能力にはそれほど目立つ進歩が見られなかった。それは今回の研究対象者の言語能力はすでに新しい日本語能力試験2級に合格する中上級学習者に属しており、渡航前にある程度の文法レベルまで達していたためであると考えられる。中上級の学習者が目標言語環境に置かれても、文法能力の進歩はそれほど見られないという可能性が示唆された。

以上の調査結果は、今後の選抜検討、留学の事前教育及び異文化交流・適応に寄与すると考えられる。

なお、研究結果は「台湾人留学生の日本イメージの変容に関する一考察」と「台湾人留学生の言語能力と日本イメージの変容に関する一考察 - 」と題して、『開南大学日本言語文化学会』(2013年1月)及び、『台湾日語教育学会』(2013年5月)で口頭発表予定である。また、2012年12月の『台大日本語文研究』24に「指示詞の習得に関する信念と学習ストラテジーとの関連 - JSL 学習者と JFL 学習者との比較 - 」と題した論文の掲載を予定している。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

(予定)孫愛維「台湾人留学生の言語能力と日本イメージの変容に関する一考察」『台湾日語教育学会』2013年5月

(予定)孫愛維「台湾人留学生の日本イメージの変容に関する一考察 - PAC分析と半構造化面接を用いて」『開南大学日本語文化学研究会』2013年1月

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

孫愛維(2012年12月)「指示詞の習得に関する信念と学習ストラテジーとの関連 - JSL学習者とJFL学習者との比較 - 」『台大日本語文研究』24,149-173

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)